小学校　道徳　部会

部会長名　添田町立 落合 小学校　校長　長畑　理恵
実践者名　川崎町立川崎東小学校　教諭　井村　　昴

1　研究主題

豊かな心をはぐくむ道徳教育の創造
～「特別な教科　道徳」の特質を活かした「考え、議論する」授業の創造～

2　主題設定の理由

（1）現代社会の要請から

現代社会では、コミュニケーション能力の欠如や人間関係の希薄さ、倫理観の低下等から少年による重大犯罪の増加､ネットトラブル等の様々な社会問題が起きている。この中でも、いじめの問題は深刻である。暴言・暴力といった内容のいじめに加え、近年では、ＳＮＳ等を使ったいじめが増加している。いじめを理由として自らの命を絶ってしまうと言う痛ましい問題も後を絶たない。

これから人生を築いていく子ども達が生きていく世の中では、深刻ないじめに本質的に向き合う力や決まった正解のない予測困難な時代を生きる力といった社会的ニーズが一層高まると予想される。このような社会で生きていくためには、一人一人が様々な問題を自分の問題として捉え、自分の考えをもち、他者と対話しながらより良い生き方を目指す資質や能力を身に付け、豊かな心をはぐくんでいく必要がある。

（2）道徳教育のねらいから

平成 30 年度より「特別の教科　道徳」が全面実施となった。道徳科の目標は「より良く生きるための基盤となる道徳性を養う」とされ、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標と同一でわかりやすい表現になった。また、道徳的価値について自分との関わりも含め理解し、それに基づいて内省し、多角的・多面的に考え、判断する能力、道徳的心情、道徳的行為を行うための意欲や態度を育てるという趣旨が明確化された。

このように、子どもの発達段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の子どもが自分の問題として捉え、「問題」に対して、「あなたならどうするか」を真正面から問い、自分自身のこととして、多面的・多角的に考え、議論していく「考え、議論する道徳」へ転換することが求められている。

3　主題の意味

（1）研究主題について

「豊かな心」とは、人間がより良く生きたいという願いを持って、かけがえのない自分自身を大切にするとともに、同じくかけがえのない他との関係を大切にしようとする知・情・意の総体としての心である。

知：人間としてよき行為を判断する知性（道徳的判断力）

情：人間としてよき行為を志向する感性（道徳的心情）

意：人間としてよき行為を発動する意志（道徳的実践意欲と態度）

人間は、かけがえのない唯一無二の存在であり、同時に他とつながり合っている存在でもある。すなわち、自己を大切にするとともに、他者を大切にするという自他共によりよい姿を目指して心を耕された状態の心が豊かに繋がると考える。「豊かな心をはぐくむ道徳教育の創造」とは、道徳教育を、豊かな心をはぐくむ核と捉え、充実させることである。

（２）副主題について

○　「特別な教科　道徳」の特質

道徳科が目指すものは、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標と同様によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。そのために、「道徳的諸価値についての理解をもとに、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考え方を深める学習を通して、道徳的な判断力・心情・実践意欲と態度を育てる」とも目標が定められている。

①　道徳的価値について理解する

道徳的価値とは、より良く生きるために必要とされるものであり、「道徳的価値について理解する」とは、人間としての在り方や生き方の礎である道徳的価値を３つの観点から理解することである。

ア　価値理解

人間としてより良く生きる上で、道徳的価値内容は大切であると理解させる。

イ　人間理解

道徳的価値は大切であっても、なかなか実現できない人間の弱さを理解させる。

ウ　他者理解

道徳的価値を実現したり、実現できなかったりする場合の感じ方、考え方はひとつではなく多様であるということを理解させる。

②　自己を見つめる

道徳的価値の理解を図るには、子ども一人一人がこれらの理解を自分との関わりで捉えることが重要である。「自己を見つめる」とは、自分のこれまでの経験やその時の感じ方、考え方と照らし合わせながら、考えを深めることである。

③　物事を多面的・多角的に考える

「物事を多面的・多角的に考える」とは、物事を一方向からだけでなく多様に捉えることである。子どもが多様な考え方や感じ方に接し、その多様な価値観を前提として、他者と対話したり協働したりすることで、物事を多面的・多角的に考えることにつながる。

④　自己の生き方について考えを深める

「自己の生き方について考えを深める」とは、ねらいとする道徳的価値から自

分を振り返り、これからの生き方の課題について考えたり、いかにより良く生きるかという人間としての生き方を模索したりすることである。

道徳が教科となっても、日常の生活体験と深く関わり合いを意識しながら。教育活動全体を通して学ばせていくことに変わりはない。しかし、変わらなければならないこともある。それは、授業改善である。子ども一人一人が道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多角的・多面的に考え、自己の生き方についての考えを深めるためには、それに応じた学習過程や指導方法を工夫することが大切である。また、児童の学習状況や道徳性に関わる成長の様子を様々な方法で捉え、ここの成長を促すとともに、それによって自らの指導を評価し、改善に努めることが大切である。

○　「考え、議論する」授業の創造

「考え、議論する」授業とは、子どもが常に自分の生き方を見つめながら、みんなで多様な視点から話し合い、語り合うことを通して自己のよりよい生き方を考えていく学習といえる。

その学習を創造していくためには、学習過程の各段階に取り入れる最適な指導方法を考え、これらを関連・一体的に捉え、それを組み合わせて、子どもの発達段階や実態、ねらいに応じた多様な指導方法を工夫し、対話活動を仕組んでいかなければならない。

導入では、普段の自分の考えや言動について振り返り、「どうしてずるい心が出てしまうのだろう」とか「命を大切にするとはどういうことだろう」などのように、自分の生き方（考えや言動）について一人一人が課題意識を持つようにする。そのうえで教材に出会い、教材の登場人物の生き方について「どうしてそう（道徳的行為）できたのか」と疑問を感じたり、「自分もそういう思いをしたことがある」と共感したりしながら、みんなでよりよい生き方について話し合い、自分の思いを語り合って、自己の生き方についての課題の答えを探していく。つまり、教材の登場人物の考えや言動について話し合っているときも、友達の思いや考えを聞いているときも、子どもの意識は常に自己の生き方の上にあるといえる。

このように、「考え、議論する」授業では、子どもが自己の生き方を見つめ、よりよく生きたいという願いをもち、登場人物や友達の考えや言動に触れながら考えを深めていく授業になるように道徳科の特質を活かした学習過程や指導方法を工夫する必要がある。

4　研究の目標

豊かな心を持つ子どもを育成するために、「特別の教科　道徳」の授業における指導方法の在り方を究明する。

5　研究仮説

「特別の教科　道徳」において、次のような指導方法や評価方法を活用、工夫すれば、豊かな心をもった子どもをはぐくむことができるであろう。

6　研究の計画（授業の計画）

（1）　主題名　しんせつは　いい　きもち　＜Ｂ－（７）　親切，思いやり＞

教材名　「はしのうえの　おおかみ」　（出典　日本文教出版）

（2）　主題設定の理由

○　「親切，思いやり」とは、よりよい人間関係を築く上で身近にいる人とのふれあいの中で、相手のことを考え、優しく接することができるようにすることをねらいとしている。この時期の児童は、学校生活にも慣れ、家族だけでなく地域の人や先生、友達などとの関わりが次第に増えてくる。発達的特質から自分中心の考え方をすることが多く、自分がやりたいことを優先し、人間関係が上手くいかないこともある。様々な人々との関わり合いが出てくるこの時期に、相手のことを考え優しく接する態度を養っていきたい。また、相手の喜びを自分の喜びとして受け入れられるようにし、具体的に親切な行為ができるようにすることを大切にしたい。

○　本主題の指導にあたっては、意地悪することに気持ちよさを感じていた狼が熊との出会いを通して、行動を変えていく姿から、意地悪の面白さより、親切にしたときの気持ちよさに共感させたい。導入では、親切にされたことのある経験を想起させるために、学校での縦割り班の写真を提示し、上級生に親切にされたときの気持ちを発表させ、道徳的価値への方向付けをする。さらに親切にしたときの気持ちを問うことでめあてへとつなげる。展開前段では、一本橋を渡ろうとしていたうさぎに意地悪をし、「えへん、へん。」と言ったときの表情、一本橋を渡ろうとしていたうさぎに親切な行動をし、「えへん、へん。」と言ったときの表情をかかせることを通して、狼の気持ちをつかませる。そのときの狼の心情の違いを話し合わせることで、親切な行動が自分も相手も気持ちよくなることに気付かせる。展開後段では、道徳的価値の自覚を図ることができるように、日頃の児童の写真を提示し親切にしたときの気持ちを想起させ、本時学習で分かったことやこれから大切にしたいことを交流させる。終末では、本時の価値の高まりを実感できるようにするために、担任からの手紙を読む。

◇　視点１　道徳科の特質を生かした学習過程や指導方法の工夫

・価値内容に関する場面の提示や発問の工夫をする。　・表情図による視覚的表現活動を工夫する。

◇　視点２　授業評価の方法

・終末段階において、分かったことやこれから大切にしたいことを交流させ評価をする。

（3）　本時のねらい

おおかみの気持ちの変容について話し合う活動を通して、意地悪をしたときよりも親切にしたときの方が気持ちがよいことに気付き、温かい心で身近にいる人に親切にしようとする心情を育てる。

（４）　準備　　うちわ（表情図）、流れ図、道徳ノート、児童の写真、担任からの手紙

（５）　展開

段階	学習活動と主な発問	指導上の留意点
導入	1　親切にされた経験について話し合い、めあてをつかむ。 ・うれしかった。　・たのしい ・ありがとう　・きもちがいい ・にこにこ	○親切にされたときの気持ちを想起させるために縦割り班での活動の写真を提示する。 ○道徳的価値について問題意識を持たせるために親切にしたときの気持ちを問う。
	やさしく　したときの　きもちをかんがえよう。	
展開前段	2　教材「はしの　うえの　おおかみ」をもとに、おおかみの気持ちの変容について話し合う。 （１）うさぎに意地悪をしたときのおおかみの気持ちについて話し合う。 うさぎに、意地悪をして「えへん、へん」と言っているときおおかみはどんな顔をして、どんな気持ちでいたでしょうか。 ・意地悪って楽しい ・おれはえらい ・またしたいな ・おもしろいな （２）自分よりも体の大きなくまから親切にされ、くまの後ろ姿をいつまでも見つめていた場面について考える。 ・うれしいな。 ・くまさんかっこいいな。 ・ぼくもやってみたいな。 （３）おおかみの「えへん、へん。」の言葉やそのときの表情から、はじめと最後の、おおかみの心情の違いを話し合う。 ２回目の「えへん、へん」と言ったときおおかみはどんな顔をして、どんな気持ちでいたでしょう。	○教材の内容を捉えやすくするために、場面ごとに区切って提示する。 ○意地悪をして楽しんでいる狼の気持ちをつかませるために、表情図を書かせる。 ○表情を児童同士が比べやすいように書くときは、「目と口」の二点を書くように指示する。 ○意地悪なことをされた、うさぎの気持ちを考えながら、狼の自分勝手な気持ちにふれさせる。 ○自分とは、違う行動をしたくまのやさしい行動によって、狼が驚き、心が動かされていることに気付かせる。 ○初めと最後の「えへん、へん」の心情の変化に気付かせるために再度表情図を書かせる。 ○表情図を発表させ、そのときの気持ちを問うことで、意地悪な行動は、自分だけが気持ちよくなること、親切な行動

展開後段 終末	 ・気持ちがいいな。 ・ぼくもうれしいな。 ・うさぎさんもよろこんでくれてうれしいな。 3　本時の学習を振り返り、今後の生活に生かそうとする。 ・本時学習で分かったことやこれから大切にしたいことを交流する。 4　教師の説話を聞く。	は、自分も相手も気持ちよくなることに気付かせる。その際、うさぎの気持ちや表情図も考えさせる。 ○ねらいとする道徳的価値の自覚を図ることができるように、日頃の児童の写真を提示する。 ○本時の価値の高まりを実感できるように担任からの手紙を読む。

（6）　内容項目の分析

「親切、思いやり」　B―（7）

低学年　身近にいる人に温かい心で接し，親切にすること。

中学年　相手のことを思いやり、進んで親切にすること。

高学年　誰に対しても思いやりの心をもち，相手の立場に立って親切にすること。

	キーワード	価値
低学年	身近にいる人 温かい心 親切にする	身近にいる人に広く目を向け、温かい心で接し、親切にしようとする。
中学年	相手のことを思いやり 進んで親切にする	相手の気持ちを自分のこととして考え、進んで親切にしようとする。
高学年	誰に対しても 思いやりの心 相手の立場に立って親切にする	相手の立場に立ち、誰に対しても親切にしようとする。

（７）　教材分析

条件・状況 ※主人公が直面している道徳的場面	・山の中の谷川に一本橋。長く狭くて一人しか渡れない。 ・毎日用もないのに、橋の上で待ち続ける。 ・おおかみは、小さな動物に対して威張り、追い返す。
人間的な弱さ・脆さ	・威張って追い返す意地悪が楽しくなる。
回転軸（きっかけ） ※主人公が変革するきっかけ	・自分より体の大きなくまと出会い、くまから抱き上げられて橋を渡してもらう。
価値への目覚め	・くまの後ろ姿をいつまでも見つめていた。 ・くまのときと同じ場面にでくわす。
価値の納得	・おおかみが、くまのようにうさぎを抱き上げ、渡してあげ、前（意地悪をしていたとき）よりずっといい気持ちになった。

（８）　板書計画

７　指導の実際

（１）導入について

本学級の児童は、入学してから６年生にたくさん親切にしてもらった経験が多い。また、親切にした経験もたくさんあり、親切にしたら相手が喜んでくれるということはわかっている。しかし、自己中心的な考えで、意地悪な行動をしてしまうこともある。このことから、親切にすることで、相手も自分も気持ちよくなることに気付いていないということが考えられる。

本時の導入では、６年生から親切にされている写真を提示し、親切にされた経験を想起させるとともに、親切にした人（６年生）や自分が親切にしたときの気持ちを問うことで本時の道徳的価値について問題意識をもたせることができた。

（２）展開前段について

【主人公の心情の変化について考える】

本教材「はしのうえのおおかみ」は、一本橋を渡ろうとしていたうさぎに、意地悪な言動をして、意地悪をすることに面白さを感じている狼が主人公の教材である。資料前半では、うさぎに対して威張るように、「こらこら、もどれ、もどれ。おれが先にわたるんだ。」「えへん、へん。」という主人公の意地悪な心が表現されている。また、資料後半には大きな熊が狼に対して、親切で優しい行いをしたり、その親切な行動を狼も真似したりしている場面から、意地悪をするよりも親切した方が気持ちよいという狼の心の変容を捉えさせた。

【児童の反応】

【資料前半の狼の表情図】

【資料後半の狼の表情図】

資料前半の意地悪をした狼の表情図と資料後半の親切にした狼の表情図を比べると、ほっぺに「ｗ」や「●」がついたり、目が「^　^」から「＞＜」になったりと同じにこにこの顔でも変化が見られた。友達の表情図を見比べたり、理由を交流したりすることで、狼の心情について深く考えることができていた。

さらに、意地悪よりも親切にする方がとてもいい気持ちになることをおさえるために、黒板には、うさぎの表情図も用意することで、より児童が道徳的価値をとらえることができていた。

また、前半と後半で表情図を書かせる場面での発問を類似したものにすることで、狼の心情の変化に気付くこともできていた。

（３）展開後段について

【道徳的価値の自覚を図る】

展開後段では、日頃の児童の写真を提示し親切にしたときの気持ちを想起させ、本時学習で分かったことやこれから大切にしたいことを交流させた。

①黒板消しをしている友達をお手伝いする写真

②筆記用具を落としてしまったときにみんなで片付けを手伝っている写真

具体的な場面を提示することで自分たちにも、親切な行動をしていい気持ちになった経験があることに気付くことができていた。

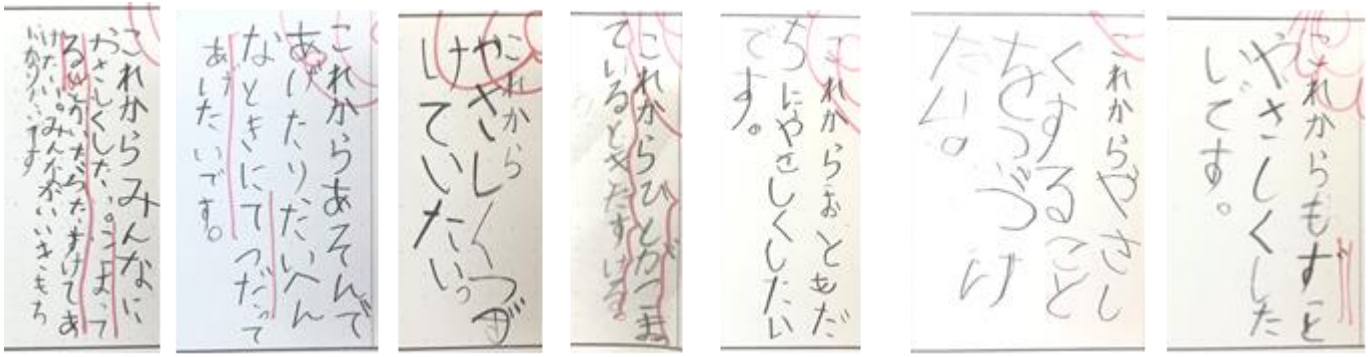
（４）終末段階について

終末段階は、本時の価値の高まりを実感できるようにするために担任からの手紙で、日

頃の児童の親切にしている姿を紹介した。

手紙を聞くことで、親切にしている自分に気付き、親切が自分も周りもいい気持ちになることを再確認することができた。

【児童の振り返り】



８　成果と今後の課題

（１）成果

〇心情をとらえさせるために表情図を使うことは有効だった。

〇導入や展開後段において、具体的な場面を写真で提示することで教材から一般化までスムーズに行うことができた。

〇考えさせる場面を焦点化することで、道徳的価値にせまることができた。

（２）今後の課題

●教材の前半と後半で、狼が何を思っていい気持ちなのか、何を大切にしていい気持ちなのかを深く考えさせることで、親切は相手も自分もいい気持ちということへの理解が深まるのではないかと考える。

●教材をもっと分析し、道徳科のいろいろな表現活動を利用していくと、道徳学習の幅が広がる。

（価値覚醒の場面に焦点化すると・・・、いい気持ちを心情円盤で表すと・・・）

◎　参考文献

・小学校学習指導要領解説　道徳編

・道徳教育実践ハンドブック（改訂版）　福岡県教育委員会

・考え、議論する道徳②蛙指導の鉄則５０　　加藤宣行　明治図書